

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 24 日現在

機関番号：25502

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2011～2013

課題番号：23530739

研究課題名(和文) 発達障害児の早期支援における子ども理解と家族支援のためのサービスモデルの開発

研究課題名(英文) Development of a Service Model for the Early Support of Children with Developmental Disabilities and Their Families

研究代表者

藤田 久美 (Fujita, Kumi)

山口県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：40364129

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円、(間接経費) 540,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では発達障害早期支援における初期アセスメント及び家族支援の方法を検討した。初期アセスメントに導入する「子ども理解シート」を作成し、専門機関に導入した結果、シートの導入が家族と支援者が共に子どもの発達や障害の理解を深めるツールとして有効であることが明らかになった。専門機関による家族支援を補完するサービスの開拓として大学研究室と専門機関との連携を実現させた子育てサロンを定期的を実施した。その結果、関係機関が相互補完的な役割を担いながら地域を基盤とした子育て支援システムに包含した発達障害早期支援モデル及び発達障害の診断前後に導入する家族支援に特化したサービスの具体的な方法を提案することができた。

研究成果の概要(英文)：In this study, we investigated an initial assessment and a method of family support targeting early support for developmental disabilities. We created an Understanding Children Sheet. After introducing it to disability service providers, it became clear that the sheet was a useful tool for both families and supporters to deepen their understanding of the child's development and disabilities. A childcare salon was run periodically by the providers as a pioneering service to supplement family support, which was implemented through their collaboration with a university research department. As a result, while carrying out mutually complementary roles, the providers were able to propose: an early support model for developmental disabilities, which included a region-based childcare support system, and; a specific service method specializing in family support, to be introduced before and after the diagnosis of a developmental disability.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：社会学・社会福祉学

キーワード：発達障害支援 早期支援モデル 子ども理解 家族支援

## 1 研究開始当初の背景

近年、発達障害の早期発見・早期支援の重要性が叫ばれ国内外で研究がすすめられている。筆者はこれまで幼児期の発達障害の診断前後の支援にかかわる福祉サービスの現状と課題を整理し、発達障害の気づき・発見後の児と家族への支援のあり方を検討してきた(藤田 2011)。発達障害が疑われる子どもにおいても「未診断」の状態が開始されるため、児の発達理解・支援を家族と共有することの難しさが訴えられる。このような確定診断前の支援プロセスでは、支援者と家族の発達理解、障害の特性理解を含む「子ども理解」を共有することが重要である。発達障害児の早期介入の場である福祉サービスの発達障害支援における初期アセスメントの方法を検討することが求められていた。一方、子どもの発達の遅れや偏りを指摘された家族への支援を丁寧に行うことが求められる。専門機関では児のサービスを実施する上で家族支援の重要性は認識しているものの時間の確保の難しさが訴えられる。

研究開始当初、厚生労働省では障害児支援サービスのあり方が検討されており、児童福祉法の改正直前であった。研究開始後、平成24年度に児童福祉法の改正による障害児支援サービスの充実を図るための方針が具体的に示された。このことによって障害児支援サービスを行う福祉施設やNPO等の事業所では法改正を受け、サービス提供プロセス等の大幅な見直しが必要になった。

国内外における発達障害支援分野の研究は様々な分野ですすめられていたが、障害児福祉サービスのあり方を検討した研究はほとんどみられなかった。

## 2 研究の目的

(1) 子ども理解を共有するためのツールの開発

児童発達支援事業における発達障害の初期

アセスメントの方法を検討し、子ども理解と家族支援に活用できるツールを開発することを目的とした。特に自閉症スペクトラム障害、注意欠陥多動性障害(ADHD)等の発達障害の疑いのある幼児とその家族の初期段階における理解と支援に導入するツール(「子ども理解シート」)の開発を行った。

(2) 発達障害の診断前後における母親支援の方法の検討

幼児期の発達障害の診断前後における母親支援のあり方を検討することを重点においた実践的研究を行うために、大学施設を利用した母親支援事業を企画・実施・評価し、母親支援の方法論を提案することを目的とした。

## 3 研究の方法

児童発達支援事業を実施している福祉サービス機関3カ所を研究協力機関とし、平成23年7月に研究会を組織化した。平成23年度はこれまでの研究成果を整理し、発達障害の診断前における子どもの発達アセスメント方法や家族支援のあり方に関する事例検討会や初期アセスメント方法の検討を行った。平成24年度は初期アセスメントに活用する「子ども理解シート」の作成と試行的な導入を行った上で評価・検討を行った。平成25年度は自閉症の診断前の段階で開発した「子ども理解シート」の活用の意義について事例をもとに検討した。

発達障害の早期支援における「子ども理解」と「家族支援」の方法を検討するために以下の実践やツールの開発を行った。

初期アセスメントに導入する「子ども理解シート」の開発と児童発達支援事業のサービスへの試行的導入及び評価

福祉サービス機関との連携を実現させた子育てサロンの実施・評価

福祉サービス機関における家族支援の課題を再整理し、発達障害の診断前の子どもを

育てる母親を対象としたグループ活動のプログラムの開発及び試行的実施・評価

本研究は山口県立大学生命倫理委員会の承認を得た上で、協力者への倫理的配慮を行った。

#### 4 研究成果

##### (1) 子ども理解シートの開発と導入

障害の診断のない状態の子どもの発達理解や不安や戸惑いを有する家族へのかかわり方について具体的な事例を挙げながら検討した結果、診断前の段階では、発達の遅れや偏りに着目するだけでなく、子どもの生活を基盤としたアセスメントを行う重要性や家族が子育ての中で感じている困難さや戸惑いを含めて理解することの必要性が整理された。また、自閉症スペクトラム障害の疑いが既にある場合、「ことば・コミュニケーション」「対人的相互作用、社会性」「行動、興味、こだわり等」の発達特性への理解が必要不可欠であり、家族が抱える子育て上の困難さに着目し、子どもと家族への理解を深めた上で児童発達支援計画を作成することが重要であることも整理された。検討結果をふまえ、家族が記入する「子ども理解シート」の開発を行った。項目は 遊び 排泄 食事

着脱衣 睡眠 清潔 発達について(ことば・コミュニケーション、人とのかかわり、行動面で気になること)とした。平成 24 年度に研究協力機関に試行導入し、母親が記述した内容と作成後のアンケートをもとに分析を行った結果、子どもの発達の状況を客観的に捉えなおす機会となった サービスを受けることに対して否定的な感情から肯定的な感情に変化した 子育てに肯定的な感情を持つことができた等が明らかになった。一方、支援者側は、子育てで困難さについて母親の言葉で記述された内容を読むことで母親をはじめとする家族への理解が深まることや項目ごとの記述を通して生活全

般の中の子どもの発達の情報を得ることができる等、初期アセスメントを補足するツールとして有効であることが明らかになった。

低年齢児は発達障害の気づき・発見後の発達理解が難しく、家族も子育てに対する感情が否定的になることがあるため、プロフィールブックのような家族と支援者が子ども理解を共有するためのツールの活用は有効であると考えられた。

表 1：子ども理解シートの概要

タイトル	プロフィールブック～はじめのいっぽ～
構成	表紙(子どもの名前を書く) プロフィール(名前や性別、家族構成等) 発達について(全7ページ) 遊び 排泄 食事 着脱衣 睡眠 清潔 発達について(ことば・コミュニケーション、人とのかかわり、行動面で気になること) 子ども自慢、支援者に伝えたいこと等
特徴	項目ごとに子どもの家庭での様子を記入し、支援者に聞きたいことや家族の思いなどを記入できるようにした。 母親だけでなく父親も記入し、プロフィールブック作成に協力できるような工夫 プロフィールブック作成後の感想・気づきを記入できる頁を導入。
導入方法	児童発達支援事業のサービス開始後に母親が記入し、支援者と共有。支援者は母親の記述した内容や支援ニーズを把握し、児童発達支援計画作成のための情報のひとつとして整理する。

##### (2) 関係機関との連携を実現させた子育てサロンの企画・実施・評価

###### 子育てサロンの実施・評価

大学施設を利用し、発達障害診断前後で参加できる子育てサロン運営を通して、保健センター、児童発達支援センター等(以下、専門機関)、保育所・幼稚園等の関係機関との連携を試みた。3年間 31 回の実施で、延べ 313 人の母親の参加(子どもは発達障害群 8

割、未診断 1 割、その他 1 割) があり、幼児期の利用は関係機関からの紹介が約 8 割を占めた。保健師からは「乳幼児健診後の受け皿になる」、幼稚園・保育所からは「園でできない支援の場として機能している」、専門機関からは「母親支援を補ってくれる場」等の評価が得られた。参加者からは「気軽に相談できる場」「参加者や専門家から情報が得られる」「同様の悩みを共感しあえる場」「元気をもたらえる場」等の評価を得ることができた。

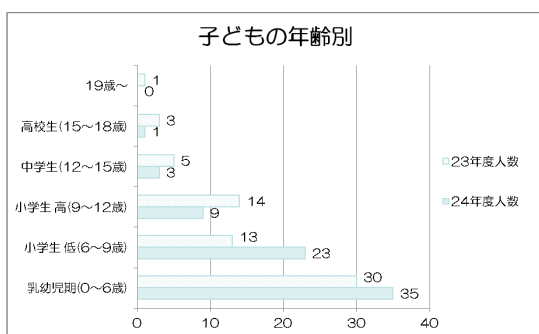


図 1：参加した母親の子どもの年齢

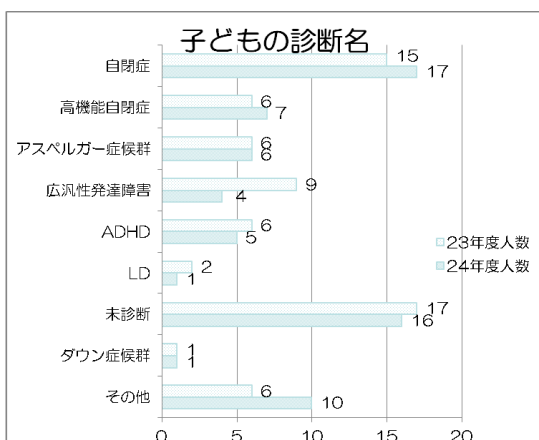


図 2：参加した母親の子どもの診断名

### (3) 未診断の子どもを育てるグループ活動のプログラムの開発・実施・評価

専門施設を利用する未診断の子どもを育てる母親サロンの試行事業としてグループカウンセリング形式で実施した。母親同士の思いや願いを語り合う活動を通して、サービスを受けることによる子どもの発達の遅れの認識や確定診断への不安・戸惑い等の否定的な感情を分かち合う場面がみられた。また、支援を受けながら少しずつ成長しているわ

が子と子育てを通しての母親の成長を確認しあう場面もあった。参加者の感想から事業に対する肯定的評価が得られた。

表 2：母親を対象としたグループ活動の概要

活動名	マザーズプログラム
実施場所	山口県立大学地域交流スペース Yucca
対象	研究協力機関から紹介された母親 5 名 (未診断の子どもを育てる母親)
目的	福祉サービス機関を利用する児の母親の子育ての悩みや困りごとを参加者同士で共有する場を試行的に実施する。 福祉サービス機関の母親支援の課題を整理し、母親の思いや願いから母親をはじめとする家族支援の方法を検討する。
プログラム	ファシリテーターとして、大学教員(筆者)が母親グループの進行を行う。 自己紹介カード作成 自己紹介をする 子育ての思い(心配なこと、不安なこと)を参加者で共有する。 子どもの可愛いところ、最近嬉しかったことを参加者で共有する 知りたい情報や質問などを出し合い、ファシリテーターが受け答えする 今日の感想を共有する

(4) 研究の総括<サービスモデルの提案>  
発達障害の気づき・発見からサービスに繋がった後に、母親への子育て支援の要素を加味したサービスを実施することが有効である。母親が子どもの発達の心配を抱えながら子育てしていく困難さや苦悩を理解し、そのプロセスを支えつつ、不安な気持ちを仲間や専門家と共有できる場の提供が必要であるだろう。さらに、支援者が個々の母親が抱える悩み・不安を理解した上で具体的な助言や支援を行うことが求められるだろう。特に、発達障害診断前後 1 年間は、家族の心理的サポートが重視され、家族が子育てに肯定的感情を醸成させ、主体的に子育ての問題を解決

するなど、それぞれの家族の自立を目指した支援が加味されなければならない。そのためには、幼児期の子どもの発達支援にかかわる各機関や支援者の専門性を活かした地域を基盤とした関係機関の相互連携を実現したシステムの構築が求められる。それぞれが果たす社会的役割を発揮させながら相互補完的な役割を担うことでサービスの質の向上が期待できる。

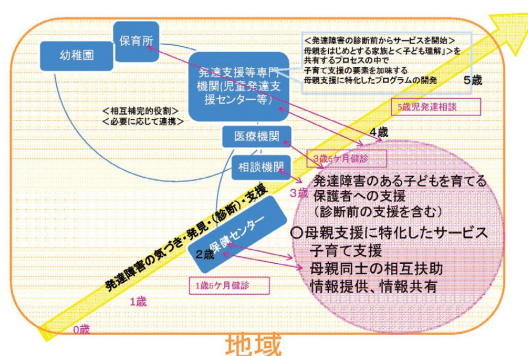


図4：地域を基盤とした発達障害の早期支援モデル

(5)研究成果の社会への還元：シンポジウム「発達障害の早期支援における子ども理解と家族へのまなざし」の開催

平成26年2月9日に地域還元シンポジウムとして「発達障害の早期支援のあり方を考える～発達支援の場における子どもと家族へのまなざし～」をテーマに実施した。参加者は165名（福祉関係者41名、教育関係者22名、保育士46名、幼稚園教諭9名、保健師4名、学生26名、保護者6名、子育て支援関係者6名）であった。

プログラムを以下のとおりである。

基調講演：12時50分～14時20分

「発達障害の早期支援における子どもと家族へのまなざし～つくしんぼ学級の実践から～」社会福祉法人侑愛会 つくしんぼ学級施設長 金沢京子氏

シンポジウム：14時40分～16時30分

<研究報告>

「幼児期にある発達障害児の診断前後のサービスのあり方」山口県立大学社会福祉学部 藤田久美

<話題提供>

特定非営利活動法人子育て支援センターしらさぎキッズ児童発達支援管理責任者 河村 礼子氏

子ども発達支援センター愛 親子通園部 ゆう保育士、横田 沙也氏

多機能型ひらきの家子ども通所サービスあばろ児童発達支援管理責任者、白井優子氏

山口県発達障害者支援センターまっぴ 主任相談員 岡村隆弘氏（コーディネーター）

社会福祉法人侑愛会 つくしんぼ学級施設長 金沢 京子氏（コメンテーター）

パネル展示：

シンポジウムの発表パネル及び個別支援計画、アセスメントシート研究成果物の展示を行った。

5. 主な発表論文等

〔論文〕(計1件)

藤田久美「発達障害児の早期支援における福祉サービスのあり方 - 発達障害の診断前後に着目して - 」山口県立大学社会福祉学部紀要第18号、2012年3月、査読無、50-77

〔学会発表〕(計1件)

藤田久美「発達障害支援における早期支援モデルの開発」日本保育学会第66回大会2013年5月11日、中村学園大学（福岡県）

〔その他〕(計2件)

藤田久美実践報告「発達障害支援における子育てサロン活動の実践的研究 - 大学施設を利用した<ママかんフリーカフェ>の実践から - 」山口県立大学社会福祉学部紀要第19号、2013年3月、査読無、77-86

藤田久美報告パンフレット「発達障害の早期支援における子どもと家族へのまなざし」2014年3月発行

## 6 . 研究組織

(1)研究代表者

藤田 久美 (FUJITA, Kumi )

山口県立大学・社会福祉学部・教授)

研究者番号：40364129

(2)研究分担者

(3)分担研究者